

理事長就任のご挨拶

日本臨床催眠学会理事長

松木 繁

(鹿児島大学大学院臨床心理学研究科 教授)

先日の日本臨床催眠学会第15回大会の総会において第2代理事長としてご承認頂きましたので、理事長就任にあたって一言ご挨拶を申し上げます。

本学会初の理事長選挙においては、ご推薦頂いた多くの理事の先生方から賜りましたお言葉ひとつひとつが身に余る光栄であると同時にその重責を考えると身の引き締まる思いでいっぱいです。誠に微力ではありますが、本学会の発展のために誠心誠意頑張りたい所存ですので、どうか会員の皆様の温かいご支援をよろしくお願い致します。

さて、理事長就任にあたって本学会の今後の展望を述べたいと思います。第15回大会の理事長講演において、「臨床催眠学会の今後の展望－臨床実践力の向上・専門性・独自性の観点から－」というタイトルで既に示した通り、基本方針としては、「臨床実践力の向上」を目標に掲げたいと考えています。そのためには、臨床実践力の向上に繋がる研修システムの新たな構築が必須条件となります。

研修内容の工夫として、これまでの講義（催眠理論等）、演習（研修会でのデモ・相互実習等）中心の研修から臨床現場での実践に繋がる研修内容（例えば、具体的な事例に沿った形での「適用事例の検証」、「効果的な治療技法の選択」、「治療計画の立て方」等々）の強化、さらには、臨床現場での実践を支えるためのスーパービジョン体制の構築も必須と考えられます。また、これまで、研修到達目標も曖昧なまま行われてきた経緯がありますので、今後は時間をかけてでも研修到達目標に関しての客観的評価基準・規準の作成を行っていくことが重要かと考えられます。これら全ての点で先進的に研修システムを構築してきたアメリカ臨床催眠学会（ASCH）が参考になると思われますが、わが学

会においては、我が国の臨床現場での催眠適用の現状に照らしながら我が国独自の工夫を行っていくことも重要と考えられます。

一方、臨床実践力の向上と共に必須なのが、催眠を臨床適用する際の科学的根拠に基づく専門性が確立していることです。前述のように、この点においても、ASCH の研修システムが大いに参考になりますが、我が国の催眠研究の現状を考えると、そのシステムを現時点で全て取り入れることは困難と考えられます。ASCH の研修システムを取り入れながらも、我が国における催眠研究、臨床実践の現状に根差した独自性も尊重することが本学会の発展には重要なことと考えられます。そのためには、実験・基礎研究を含めた臨床催眠の科学研究を本学会においても活性化させることが急務です。学会の活性化に依拠せざるを得ませんが、研究促進のための予算的な措置を講じられるならば研究奨励基金を立ち上げて学会員の研究を奨励することも考えています。

さらに、学会のさらなる発展のためには、これまで活発に活動してきた実績のある地区研修会との連携も重要と考えられます。地区研修会の活性化は、会員の研修機会の確保、研修意欲の向上、臨床実践の場の増加にもつながる可能性が高いので、既存の地区研修会との連携の在り方に関するルール作りを行って相互的に機能を高める工夫を今後考えて行きたいと考えています。

最後になりましたが、私の基本方針として、これまで高石 昇前理事長および大谷 彰前理事によって構築されてきたアメリカ臨床催眠学会（ASCH）との連携は今後も引き続いて行っていきたいと考えていますが、それは従属的な関係ではなく日本臨床催眠学会（JSCH）の立ち位置をしっかりと見極めて、我が国からも世界に発信できる学会となれるように、実証性のある臨床催眠の実践と研究とを行くことが重要だと考えています。